

ハーマン・メルヴィルの『避雷針売りの男』について

池 田 正 博*

On Melville's *The Lightning-Rod Man*

Masahiro Ikeda

要 旨

『避雷針売りの男』(*The Lightning-Rod Man*, 1854) は、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819 ~ 91) の最も短い短編の一つであるが、単純なストーリーの表面下により深い意味を持つものになっている。この作品は、専ら会話で構成されまたより深い重要な意味が隠喩によって呈示されているという点で、メルヴィルの短編の中でもユニークである。

語り手と避雷針売りの男の間でなされる議論は、互に根本的に相容れない生き方や信念に基づくものであり、対立する二つの生き方や信念の相剋を意味するものに他ならないのである。両者共に、登場の初めから、それぞれ独自の生き方や信念を持ち、共に最後まで怯むことなくまた屈伏することもなく議論を続ける。

語り手が避雷針を拒む理由は、ただ単にその必要性がないからに過ぎない。彼は、既にある種の自己満足的な世界に身を置き、自然の脅威に身をさらし決然と立つのである。自然界の営みのただ中に彼自らが一種の避雷針と化しているからである。このような人物は、この短編のタイトルとは無関係に、『白鯨』(*Moby-Dick, or The Whale*, 1851) の主人公エイハブ (Ahab) を想起させるところがある。しかし、彼の生き方や信念そのものはエイハブのそれとはむしろ対抗的なものであるように思われる。

以上のような特徴を持つ『避雷針売りの男』は、メルヴィルの代表的な短編の一つであり、その具体的な特徴と作品の持つ意味について検討してみたい。

()

『避雷針売りの男』は、物語が専ら会話で構成され隠喩が多用されている点で、他のメルヴィルの短編とは異なった特徴も具えている。彼の短編の中には、偏在的視点が欠如し、しかも語り手が登場人物の内面世界を代弁できないという制約を課されている場合が少なくない。このような創作手法は、読者の作品解釈を拘束し作品の世界を曖昧性や不可促性を伴うものになっている。作者メルヴィルは、自らはいわば物語の背後に身を潜め、このような特徴を持つ作品の解釈を読者に迫るのである。彼の最初の短編『書記バートルビ』(*Bartleby, the Scrivener*, 1853) は、その代表的な作品の一つであるが、『避雷針売りの男』もこのような特徴を具えている。会話形式は平成18年9月21日受理 *教養部教授

人間の意志の疎通という問題をより直接的に扱うものであり、隠喩手法は物語のより深い意味を明確な形で呈示するためのものであろう。しかし、この作品はこれらの形式と手法を具えてはいても、なお曖昧性や不可促性を伴ったものになっている。

作品のストーリーそのものは甚だ単純である。ある9月初旬の午後、大雷雨の中を、マサチューセッツ州の山間の高台に住む語り手のもとに、避雷針売りの男が見本を持って訪ねてくる。大雷雨の襲来の一瞬に、この商人は頻りに雷電に恐怖する言葉を発しつつ、雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などを説き、最後に避雷針の購入を激しい言葉で迫る。それに対して語り手も憤激して反論し、結局は避雷針そのものの必要性を認めない。避雷針売りの男は、語り手を不信神者と呼び、語り手に見本の避雷針を突きつけ跳びかかってくる。語り手は、その避雷針を奪い取って踏みつぶし、腕力をもって彼を追い出してしまう。この避雷針売りの商人はその後もこの地に留まって人間の恐怖心と見事な取引をしている、と語り手は告げる。物語は二人の人物の専ら会話で構成され、物語の一切は一方の当事者である語り手の視点を通して告げられる。もっとも、会話といってもそれは質問と返答のやり取りという形の議論であり、またその議論は両者の生き方や信念のいわば相剋という意味を持つものになっている。そして、互いに相容れない生き方や信念が、ついには爆発的な反応をきたすことになる。避雷針売りの商人は既成のキリスト教の価値観を持つ人物であり、他方、語り手はその価値観にある種の距離を置く人物であると考えられる。このような避雷針売りの商人が自然界の営みである雷電に恐怖しその危険性を説いて避雷針の購入を求め、他方、語り手は雷電に全く恐怖せずむしろそれを歓迎して避雷針を必要としない、という皮肉な話でもある。

()

物語は、大雷雨という自然条件をその支配的背景としている。つまり大雷雨は語り手と避雷針売りの男にとっての一種の極限的な状況を意味する。両者は、このような状況の下で、雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などをめぐる議論を展開するが、その議論は単なる商取引にまつわる議論に止まるものではなく、両者の人間としての在り方を、つまり人間の生き方や信念を示すものになっている。そして、物語のより深い重要な意味は、隠喩に拠って呈示されているのであるが、その典型的なものは語り手の部屋の「暖炉」として語り手の最後の反論である。物語は、主人公でもある語り手の視点を通して告げられるが、彼は登場の初めから甚だ奇異な人物であり、他方避雷針売りの男は商人として現実的で常識的な人間であると考えられる。

物語は、「暖炉」の炉石に立つ語り手の「何と豪壮、破格的な雷電かと思った (What grand irregular thunder, thought I,) p.171 」という言葉で始められる。次いで語り手は、普通の人間が恐怖する筈の大雷雨を、一種高揚した気分をみせながら「素晴らしい (glorious)」ものとして歓迎する。そして、雷鳴の轟く中を剥き出しの避雷針を手に訪ねてくる避雷針売りの男を「気高い雷雨 (noble storm)」をもたらしてくれた「雷神 (Jupiter Tonans)」と呼び、丁寧な言葉と態度で迎え入れる。語り手は、この歓迎に対する商人の反応について、次のように告げる。「私がこのように気分よく話している間、このよそ者は半ば驚き半ばある種の奇妙な恐怖をもって私を

見つめた、しかし一歩も身動きしなかった（While I thus pleasantly spoke, the stranger eyed me, half in wonder, and half in a strange sort of horror; but did not move a foot. p.172）。語り手は、このように迎え入れた避雷針売りの男に濡れた服を暖炉で乾かすように勧めるが、彼はそれに応じない。その両者のやり取りは次のように告げられている。

‘ Sir, ’ said he, ‘ excuse me; but instead of my accepting your invitation to be seated on the hearth there, I solemnly warn you, that you had best accept mine, and stand with me in the middle of the room. Good heavens! ’ he cried, starting — ‘ there is another of those awful crashes. I warn you, sir, quit the hearth. ’

‘ Mr. Jupiter Tonans, ’ said I, quietly rolling my body on the stone, ‘ I stand very well here. ’
‘ Are you so horridly ignorant, then, ’ he cried, ‘ as not to know, that by far the most dangerous part of a house, during such a terrific tempest as this, is the fireplace? ’

‘ Nay, I did not know that, ’ involuntarily stepping upon the first board next to the stone. (p.173)

このように答える避雷針売りの男は、語り手が彼を引き続き「雷神」と呼ぶのに対して、次のように言う。「そんな異教の名前で呼んでくれるな。こんな恐ろしい大雷雨のさなかというのに、あなたは神を汚すものだ（Call me not by that pagan name. You are profane in this time of terror） p.173」。物語冒頭で「暖炉」の炉石に立ち商人を歓迎した語り手は、その後も「暖炉」を離れることがなく、商人も語り手に濡れた服を暖炉で乾かすように再度勧められても、部屋の中央に位置し決して暖炉に近寄らない。後に部屋の中央が比較的安全であると言う商人は、語り手に部屋の中央にくるようにと警告するのである。両者は、それぞれこのような「暖炉」と「部屋の中央」に位置し、雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などをめぐって議論を続けることになる。語り手は丁寧な言葉と態度で様々なしかし単純な質問をし、商人もそれに対して具体的に丁寧に説明、返答する。

両者の議論は質問と返答のやり取りから成るが、しかし結果的にみれば、両者の間には真の意志の疎通が成立していないと考えられる。避雷針売りの男が商人としてそれなりに真剣な態度で臨んでいると受け取れるのに対して、語り手は、結果的にみれば、このような商人を愚弄しているものと考えられる。このような語り手の対応には、根本的な理由、原因がある筈であるが、それは物語の最後の場面における語り手の反論の持つ意味に求めることができると考えられる。そもそも、大雷雨の中を訪ねてきた避雷針売りの男を「雷神」と呼んで歓迎する件そのものも、語り手のこのような対応が感じ取れるのである。しかし、商人が語り手に愚弄されていると感じているかどうかは不明である。語り手のこのような対応と関連する問題として検討する必要があるのは、上掲文中で、彼が家の中で「暖炉」が最も落雷の危険性があることを「知らなかった」と答えている問題である。彼のこのような返答は、彼自身が後に挙げる落雷の二つの事例から判断すると、「暖炉」も最も落雷を呼ぶ伝導体の一つであることを承知している筈であると考えられる。しかしそれにしても、語り手が避雷針売りの商人から、そのことを知らされた後も

「暖炉」から離れないということには、理由がある筈である。

()

雷電という自然界の営みに対する恐怖は人間を人間たらしめるものであり、このような意味において、避雷針売りの商人は普通の現実的な人間であり、他方語り手は甚だ奇異な人間であるということになる。商人は、近くで轟く雷鳴や落雷の度に雷電に恐怖する言葉を発するが、それは彼が普通の人間であることを意味し、また人間である筈の語り手に雷電の恐怖を煽るものでもあろう。彼は、「(雷鳴を)聞け(Hark!)」「落雷だ(Crash!)」「不意打ちの落雷だ(Swoop!)」「聞け、またもだ(Hark, again!)」などという、恐怖する言葉を二十回近くも口にするのであるが、しかし語り手はそれに対して、ただ一度「気にするな(Never Mind) p.174」と応えるだけで、全く動じることがない。

両者の在り方の違いは、避雷針売りの商人が語り手の家のドアを叩く件に、早くも暗示されているとも受け取れる。商人は、語り手の家を訪れた際にドアのノッカーを用いず直接手で叩くのであるが、それは語り手にとっては「男らしく(man-fashion) p.171」ない行為であると言う。そして、商人の外見の姿を次のように告げる。「痩せた陰気な風采で、黒い直毛がもつれて縞状に額にかかり、窪んだ一物ある目の回りは藍色に隈どられていた(A lean, gloomy figure. Hair dark and lank, mattedly streaked over his brow. His sunken pitfalls of eyes were ringed by indigo halos.) p.171」。語り手は、商人のこのような行為と姿についての叙述を通して、自らは「男らしい」毅然とした人間であると言いたいのであろう。彼はその後、商人が、雷鳴や落雷の度に雷電に恐怖する言葉を発するのに対して、次のように言うのである。

‘ Hark! — Awful! ’

‘ For one who would arm others with fearlessness, you seem unbeseemingly timorous yourself. Common men choose fair weather for their travels; you choose thunder-storm; and yet — ’ (p.175)

避雷針売りの男は避雷針を設置すれば恐怖することはないとする人間であるが、このような人間にしては、雷電に恐怖する言葉を発するのは「臆病にみえる」と語り手は言う。そして、商人は自分で大雷雨時にやって来てしかも雷電を恐怖している、とも語り手は言う。大雷雨の中を剥き出しの避雷針を手に持って訪ねてきた商人を、語り手は歓迎したのであるが、いま語り手は商人を「臆病にみえる」と言うのである。それほど恐怖するのなら、晴天時に訪ねてくればいいではないか、と語り手は言いたいのであろう。語り手にとっては、部屋の中いながら雷電を恐怖する「臆病」な人間が、大雷雨の中を剥き出しの避雷針を手に売り込みにやってくるというのは、むしろ抜け目なく現実の利益に汲々として奔走する行為であるということであろう。

しかし、避雷針売りの商人は安易な生き方をしている、とは言えないであろう。彼が大雷雨の中を剥き出しの避雷針を手に持って訪ねるのは、彼の懸命な仕事に他ならない。大雷雨という天

候を利用し、雷電に恐怖している筈の人間に商品を売り込もうということであっても、それ自体は別に咎められるべきではないであろう。彼は、商人として当然のことながら、1フィート1ドルという避雷針の構造や雷電の伝導体などについて具体的に丁寧に説明する。しかし、彼の説明、議論の中には不可解なものが無いわけではないのである。榆の木の床材は、樹液に鉄分が含まれているために、他の床材よりも落雷し易いと説くのも、また濡れた服に落雷しても人間の身体は無事である、と言うのも不可解である。彼は、最初に語り手から暖炉で濡れた服を乾かすように勧められた時には、暖炉は落雷の危険性があるとしてそこには近寄らないが、その後再度勧められた時には、いま位置している部屋の中央の方がいい、濡れたままの方がいい、と言って次のように答えるのである。

‘ I am better here, and better wet. ’

‘ How? ’

It is the safest thing you can do — Hark, again! — to get yourself thoroughly drenched in a thunder-storm. Wet clothes are better conductors than the body; and so, if the lightning strike, it might pass down the wet clothes without touching the body. . . . (p.177)

避雷針売りの商人が、濡れた服に落雷してもそれを身につけている人間の身体には影響がない、など言うのは雷電の伝導体についての彼自身の説明と矛盾する話である。彼はその矛盾を十分承知の上で、敢えてこのような矛盾する説明を危険な暖炉に近寄りたくないための口実としていることは明らかである。元々、大雷雨の中を剥き出しの避雷針を手にして山間の台地に位置する語り手の家を訪ねるということ自体が、その後彼自身が述べる落雷の危険性についての説明と矛盾する、決死的な行為である。しかも、彼が言うには、彼の販売する避雷針はいわば他に類をみない性能の良いものなのである。

()

語り手と避雷針売りの商人の議論は、雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などをめぐる議論であるが、それは自然界にある人間のまさに生命に関わる在り方の問題である。部屋の中で両者の位置関係は、自然界における人間の在り方という問題を提起するものに他ならないのである。語り手の家の「暖炉」と「部屋の中央」は、語り手と避雷針売りの商人の、人間としての在り方を呈示する隠喩であることは明らかである。商人の在り方は、雷電の恐怖、危険性を認識し避雷針の有効性を信じる現実的な生き方や信念を、その根拠とするものである。そして、商人が危険だと言う「暖炉」を離れない在り方をする語り手も、その根拠とする生き方や信念を持ち合わせている筈である。語り手は、避雷針売りの商人から「暖炉」は最も落雷の危険性があると知らされても雷電を全く恐怖せず、「暖炉」から離れようとしなない。他方商人は、比較的 안전한場所だと言う部屋の中央に位置し、近くに轟く雷鳴や落雷の度に頻りに恐怖の言葉を発しつつ、語り手に「暖炉」を離れて自分の位置する部屋の中央に移動するようにと言う。両者は共に、大

雷雨という自然条件の下に一種の極限状況に置かれることによって、それぞれ自らの在り方を露にすると共に、その在り方を譲ることはないのである。

部屋の中での両者の位置関係は、自然界における人間の在り方という問題を提起するものであり、またその問題は個人の生き方や信念に基づくものであろう。従って、大雷雨という一種の極限的な状況の中で、「暖炉」と「部屋の中央」をそれぞれ定位置とする語り手と避雷針売りの商人によってなされる議論は、生き方や信念の相剋に他ならない。繰り返し言えば、雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などをめぐる議論は、自然界にある人間のまさに生命に関わる在り方の問題なのである。このような意味において、語り手が彼の家「暖炉」が最も落雷の危険性の高い構造物であることを、商人から知らされた後も「暖炉」から離れないというのは奇異なことである。彼は、避雷針売りの男から「暖炉」は最も落雷の危険性があると告げられて、「それは知らなかった」と答えている。しかし、彼が自ら挙げる二つの落雷の事例は、むしろ彼が「暖炉」も最も落雷の危険性の高い伝導体であることや、また雷電の性質などについて、経験的に承知していることを示していると考えられる。

語り手は、自ら落雷の事例を二つ挙げてそれぞれ次のように言うのである。「(教会の)尖塔、榎の大木とそれに集会室の丸屋根が落雷を受けたのは、先週土曜日の真夜中に起こったクリガンでのことではなかったのか (Was it not at Criggan last week, about midnight on Saturday, that the steeple, the big elm, and the assembly-room cupola were struck?) p.174」 「あなたは昨年のもントリオールでの事故のことを聞いていないのか。お手伝いの娘がロザリオを手にしてベッドサイドで落雷にあった。ロザリオのビーズは金属製だったから (Did you hear of the event at Montreal last year? A servant girl struck at her bedside with a rosary in her hand; the beads being metal.) p.174」 。語り手の告げるこのような事例は、背の高い木や建物や部屋の内部の金属製のビーズに落雷したという話である。一方、このような事例を挙げる語り手の家の暖炉も煙突と鉄製の薪台を備えたものであり、平屋の建物に取り付けられているこのような構造物が、背の高い木などと同様に最も落雷の危険性があるということを知らなかったと答えるのは、甚だ不可解である。彼が告げる後者の事例はカナダでのことであり、彼がそれを知ったのは恐らくは新聞によってであろうし、また彼はこれ以外にも落雷についての記事を少なからず目にしてきたことであろう。

語り手が暖炉が最も落雷の危険性があるということを「知らなかった」と言うのは、甚だ不可解である。なお、語り手がこのような事例を挙げるのは、避雷針売りの商人が雷電の伝導体となるものを数々挙げる以前のことであり、商人は、地域回りの販売活動中に伝導体になるものとして避けることにしているものの中には、木や家屋、孤立した納屋などがあると説明しているが、このような彼の説明は、繰り返し言えば、語り手が二つの落雷の事例を挙げる以前のことであり、語り手がこのような落雷の事例を挙げるのは、彼が避雷針売りの男から木や家屋、孤立した納屋などが雷電の伝導体となることを聞いてからではないのである。

自らこのような二つの落雷の事例を挙げていた語り手は、背の高い木や建物やさらには部屋の中の金属製のビーズにも落雷することを知っていることを自ら告げるものである。さらには、語り手は、後に「ライデンびん (Leyden jar) p.179」に言及する際にもその機能を承知している

のである。このように、語り手は避雷針売りの商人の説明以前において、暖炉というものも落雷の危険性の高い伝導体であることを経験的に十分承知している筈であると受け取るのが自然である。つまり語り手は、雷電の性質や雷電の伝導体となる物体などについて経験的に知っていながら、避雷針売りの男に対して知らないように装い、丁寧な言葉や単純な質問で対応し、彼を愚弄しているように考えられるのである。そして、語り手のこのような対応は、「暖炉」から離れないという彼の在り方に、つまりその在り方の根拠である彼の生き方や信念に基づくものであることは言うまでもないであろう。

()

大雷雨という条件下にある語り手と避雷針売りの男は、一種の極限的な状況の下でそれぞれの人間としての在り方を明らかにする。簡単に言えば、「暖炉」から離れない語り手は甚だ奇異な人物であり、「部屋の中央」に位置する避雷針売りの男は現実的な人間である、ということになる。確かに「暖炉」は最も落雷の危険性があるが、しかし「部屋の中央」も「暖炉」より比較的安全であるだけのことであり、決して安全ではない筈である。元々、山間の高台にある語り手の家屋そのものが、雷電の十分な伝導体なのである。しかし、このような状況下において「暖炉」をめぐる両者が持つその位置関係は、自然界にある人間としての在り方の違いを示すものである。「暖炉」に位置する語り手は避雷針売りの商人に警告されても「部屋の中央」に移動することはなく、また商人も語り手に勧められても「暖炉」に近寄ろうとはしない。両者は共に、自然界にある人間として自己の在り方を譲ろうとはしないのである。両者は共に、それぞれこのような場所をいわば存在の砦と定め、それぞれその砦の持つ意味にふさわしい質問と応答のやり取りを続ける。

雷電の性質とその危険性や避雷針の有効性などをめぐる議論は、大雷雨という一種の極限的な状況下にある人間のまさに生命に関わる問題であり、自然界における人間の在り方という問題を孕んだものに他ならない。しかし、両者は共に、結論を急ぐ様子を見せず議論を続けるのである。語り手は様々なしかし単純な質問を続け、避雷針売りの男も具体的に丁寧に説明、返答する。語り手は、物語の最後に到っても避雷針を必要とするのかどうかについて直接に口に出しては言わず、商人も最後の議論に到るまでは、商品の購入を求めずまた語り手の意思を確認しない。語り手にすれば、危険な「暖炉」に拠る自己の在り方や二つの落雷の事例を挙げることによって、自己の意思を表しているつもりであるかも知れない。二つの落雷の事例は、避雷針を備えている教会や建物の内部にいた人間にも落雷したという話なのである。他方、避雷針売りの男にしてみれば、大雷雨の恐怖こそ人間を人間とする筈のものであり、このような気象条件こそ商品の売り込みに最適の条件であろう。商人にしてみれば、避雷針の売り込みを期して十分な説明もし、最後には語り手から購入の申し込みが得られるという感触を得ているつもりであるかも知れない。事実、避雷針売りの返答や説明そのものは十分なものであると考えられる。しかし、商人は、語り手から避雷針を備えていても落雷に遭った二つの事例を聞かされても、それらの原因は設置時のミスだったなどといい、なおも避雷針の有効性を主張し続ける。

語り手と避雷針売りの男は、恐らくはそれぞれこのような思いを抱きながら、かなりの時間をかけて議論を続けてきているものと考えられる。しかし、両者の間には真の意志の疎通が成立していないと考えられる。自己の意思や目的を直接言葉で言い表わさず、また相手の意思や目的を直接言葉で確認せず、しかも、互いに自己の意思や目的が相手に伝わっている筈だと考えていると思われる。このように考えられるのは、両者の最後の議論がいわば爆発的な反応をみせるものになっているからである。これまでの両者それぞれの思いが、最後の議論になって初めて、全く根拠のないものであることが判明するからであると考えられる。互いに相容れない在り方をする両者の間では、直接の会話といえども真の意志の疎通は期しがたいという結果になっていると思われる。

両者の最後の議論は、避雷針売りの男が激しい言葉を口にして商品の購入を迫り、それに対して憤激した語り手も激しい言葉で応じるものである。避雷針売りの男は、なおも雷鳴と落雷の続く状況の中で、雷電に恐怖する言葉を発しながら、初めて語り手に避雷針の購入を求めて次のように言う。「注文しますか。買いますか。申し込みにあなたの名前を書きましょうか。厩ではずなで繋がれた馬の焼死体のような、そんな黒こげの惨状を考えてみなさい。しかも全ては一発の落雷でやられるのだ(Will you order? Will you buy? Shall I put down your name? Think of being a heap of charred offal, like a haltered horse burnt in his stall; and all in one flash!)p.179」。商人は避雷針の購入をせき立てるのであるが、彼のこの言葉は、直接的に避雷針の購入を求める最初で最後のものである。そして、それに憤然として反論する語り手の言葉も、彼が直接かつ明瞭に自己の生き方や信念を露にする最初で最後のものである。その中に次のような言葉がある。

‘ You pretended envoy extraordinary and minister plenipotentiary to and from Jupiter Tonans, ’ laughed I; ‘ you mere man who come here to put you and your pipe-stem between clay and sky, do you think that because you can strike a bit of green light from the Leyden jar, that you can thoroughly avert the supernal bolt? The hairs of our heads are numbered, and the days of our lives. In thunder as in sunshine, I stand at ease in the hands of my God. False negotiator, away! See, the scroll of the storm is rolled back; the house is unharmed; and in the blue heavens I read in the rainbow, that the Deity will not, of purpose, make war on man's earth. ’ (p.179)

ここに到るまでの語り手は、自己の生き方や信念についてもまた避雷針や避雷針売りの男に対する考えや思いなども具体的な言葉によって告げることはなかったが、いまここに到って、これらについて一気にかつ明瞭に露にするのである。彼の反論は、避雷針を備えていない彼の家が落雷に遭わないままに、いま雷雨は過ぎ去ったという自然の摂理をいわば前提としている筈である。まず避雷針売りの男についての語り手の思いを約言すれば、彼はあたかも天と地の「仲介者」であるかのような振りをし、「天上界の雷電」を完全に避けることができている思い上がった人間なのである。確かに、避雷針売りの商人は、語り手から二つの落雷の事例を告げられても、避雷針があたかも落雷の被害を絶対的に防いでくれる、という立場に固執してきたと

言ってよい。語り手が 反論 の中で真っ先に、このような在り方をしてきた商人を激しく非難するのも当然である。語り手は避雷針売りの男をこのような人間であるとして激しく非難すると共に、次いで自己自身の生き方や信念を明らかにしている。

避雷針を備えていない彼の家が落雷に遭わなかったという結果は、彼が挙げていた二つの落雷の事例とは対象的である。クリガンの町の教会は避雷針を備えていたにも関わらず落雷の被害にあい、カナダのモントリオールでは、避雷針を備えた家屋の中にいた人間に落雷したが、それは彼女の手にしていた「ロザリオ」が伝導体となったからである。このような落雷の事例を自ら挙げていた語り手は、いま、どのような自然の営みの中においても「自分の神の手の内に安心して立つ」のだと言い、「神は人間の地上世界に意図的に戦いを仕掛けはしない」とも言う。このような彼の生き方や信念は、繰り返し言えば、彼の家に落雷しなかったという結果を前提にしたものであると言わなければならない。避雷針の無い彼の家に落雷しなかったのも、また避雷針を備えていても落雷にあったクリガンの町とモントリオールでの事例も、自然現象の偶然の結果であろう。「神は人間の地上世界に意図的に戦いを仕掛けはしない」のであれば、落雷は、神の「意図的」なものではなく、それとは無縁な偶然の支配する単なる自然現象であるということになるであろう。

()

雷針売りの男は、このように反論する語り手を「不信心な祿でなし (Impious wretch!) p.179」と呼び、「神を信じない馬鹿らしいあんたの考えをみんなに喋ってやる (I will publish your infidel notions.) p.179」とも言い、語り手に避雷針を突きつけて跳びかかり、語り手はその避雷針を奪い取って踏みつぶし、避雷針売りの男を腕力をもって追い出す。避雷針売りの男は、語り手を激しく非難するのであるが、彼が語り手のこの 反論 の持つ意味をどの程度理解しているかは不明である。しかし、両者が共に、最後には腕力に訴えるという事態は、最後に到っても両者の間に真の意思の疎通が成り立っていなかったことをよく示しているとも受け取れよう。避雷針売りの男が、語り手を激しく非難する最大の理由は、語り手が「自分の神の手の内に安心して立つ」のだ、と言うからであろう。語り手の言う「自分の神」は、ウィリアム B. ディリングガム (William B. Dillingham) の指摘からも分かるように¹⁾、既成のキリスト教の客観的存在としての神ではなく、彼が自己自身の内に見出す神であろう。「神は人間の地上世界に意図的に戦いを仕掛けはしない」のであれば、彼は「自分の神の手の内に安心して立つ」ことができる筈である。語り手にとっては、落雷は神の「意図」とは無縁な偶然の支配する自然現象に過ぎないのである。しかも、それは避雷針を備えた家屋でも破壊してしまうのであり、従って、彼にとっては避雷針などというものは不要だということになるであろう。避雷針売りの男は、このような語り手の生き方や信念を感じ取って、語り手を「不信心な祿でなし」と呼び、「神を信じない馬鹿らしいあんたの考えをみんなに喋ってやる」と言うのではないだろうか。

語り手は、商人が危険だという「暖炉」を離れようとはしなかったのであるが、それは、自己自身の内にある「自分の神」の判断を信頼した在り方であろう。彼の「自分の神」の判断によれ

ば、落雷の可能性があるのは「暖炉」のみならず「部屋の中央」も、そしてさらには彼の家そのものも含まれる、ということではないだろうか。彼が挙げる二つの落雷の事例はなによりもこのような可能性を示しているのではないか、という判断であろう。危険なのは「暖炉」だけに限らず家そのものも危険であり、従って家の中のどこに居ても同じである、ということであろう。大雷雨というような大自然の営みには、自己自身の内にある「自分の神」のこのような判断を信頼し、家の中に居る限りは、その後のことは偶然の支配する大自然の営みに身を委ねるという在り方をする、ということであろう。彼は、避雷針売りの男が雷鳴や落雷の度に恐怖の声を上げるのに対して、ただ一度「気にするな」としか言わないのも、このような彼の生き方にとっては、恐怖の声を上げることは無用のことなのであろう。語り手の言う「自分の神」とはこのような彼の生きかたや信念を言い表すものであり、「暖炉」を離れない語り手の在り方は、このような彼の生き方や信念をいわば可視化したものとも言えるであろう。

結果的にみれば、雷電に恐怖せず「暖炉」を離れない語り手は、このような在り方に抛って、避雷針を不要とする生き方や信念を示していたことになる。彼は、避雷針売りの男が雷鳴や落雷の度に恐怖の声を上げるのに対して、ただ一度「気にするな」としか言わず、商人が危険だという「暖炉」を離れようとはしなかったのである。避雷針売りの商人に対して、二つの落雷の事例を挙げた後の語り手にしてみれば、彼のこのような在り方を目の当たりにしている商人は、彼が避雷針を信用していないということは分かる筈だ、ということであろう。二つの落雷の事例は避雷針を備えていても落雷の被害に遭うということを示しているのである。語り手が避雷針売りの商人を愚弄していると考えられるのは、本質的には、このような語り手の生き方や信念に起因するものと考えられる。語り手の 反論 は、結果的にみれば、彼が避雷針売りの商人を愚弄してきたということを如実に示している。避雷針売りの商人が、語り手に愚弄されていることに気づいているかどうかは不明である。しかし、彼はこれまではそのことに気づいていないとしても、語り手の激しい 反論 を聞かされたいま、十分にそれに気づいている筈であろう。語り手の 反論 に対して商人が口にする激しい非難の言葉には、長らく語り手に愚弄されてきたという思いも込められているとしても不自然ではないであろう。語り手は彼の 反論 に到るまでは、避雷針が不要であることを一言もいわずに、商人に単純な質問をしその説明を求めてきたのである。

()

しかしながら、雷電という自然の営みに恐怖することが、人間を人間たらしめるとすれば、雷電に恐怖せずむしろそれを歓迎する語り手は、甚だ奇異な人間であることに変わりはないであろう。彼は、普通の人間にとっては恐怖でもある自然界のただ中に立ちその営みに身を曝すという在り方をし、その在り方を「男らしく」生きる術としているといつてよい。彼は、いわば一種の自己満足的な独自の世界に身を置き、自然の脅威に身を曝し決然として立つのである。それは正しく自然界の営みのただ中に自らが一種の避雷針と化している姿である。このような在り方をする語り手は、明らかに『白鯨』の主人公エイハブを想起させる人物であるが、しかし、「神は人

間の地上世界に意図的に戦いを仕掛けはしない」と言う人間である。両者ともに避雷針を不要とするのであるが、『避雷針売りの男』の語り手が避雷針を不要とするのは、彼にとっては「神は人間の地上世界に意図的に戦いを仕掛けはしない」からであり、このような世界にある語り手は「自分の神の手の内に安心して立つ」ことができるのであろう。リチャード・チェイス (Richard Chase) の指摘からも分かるように²⁾、語り手は、自然の営みに徒に恐怖することなく、その営みのただ中において主体的な人間としての自己の判断に信を置いた在り方ができる、と考えている人物であるように思われる。彼の言う「自分の神」とは、このような彼の生き方や信念を言い表すものであろう。他方、エイハブが部下に対して船の避雷針を使用するなと命じるのは、悪の存在を許容するこの世界の造営者に対して、全人類の代表者として、対等な戦いを挑むためである。『避雷針売りの男』の語り手はエイハブを想起させる人物であるが、しかしその生き方や信念はむしろエイハブとは対抗的なものであろう。しかし、「自分の神」を持つ語り手は、既成のキリスト教の価値観にある種の距離を置いた在り方に自己の存在の意味や価値を見い出している人物であり、このような意味において、メルヴィルの短編を代表するヒーローの一人であると考えられる。

注

The Lightning-Rod Man からの引用は次のテキストに拠る。 *The Works of Herman Melville, Standard Edition*, Vol. . (New York: Russell & Russell) 1963.

- 1) William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction* (Athens: The University of Georgia Press, 1977) p.169.
- 2) Richard Chase, *Herman Melville: A Critical Study*(New York: Hafner Publishing Company, 1971) p.166.

Summary

The *Lightning-Rod Man* is one of Melville's shortest tales, but it bears deeper meanings which underlie the surface of the simple story. The tale is unique among Melville's tales in that it consists mostly of a conversation and that the deeper and significant meanings are presented in metaphor.

The argument carried on by the narrator and the lightning-rod man is based on their principles of life and faith, which are basically incompatible with each other; it means nothing but the conflict between two opposing principles and faiths. From their very first appearances in the story, both characters hold their own principles of life and faith. They continue arguing, with neither of them daunted or argued down to the end.

The reason for the narrator's rejection of a lightning-rod is simply that he doesn't need one at all. He has placed himself in a self-satisfied realm and stands resolutely exposing himself to the perils of nature; he himself has become a kind of lightning-rod personified in the midst of the workings of nature. A character of this nature is reminiscent of Ahab, the hero of *Moby-Dick*, irrespective of the title of the tale. But his very principles of life and faith seem to be rather confronted with those of Ahab.

The *Lightning-Rod Man*, with these characteristics briefly mentioned above, is one of Melville's

representative tales. I intend to discuss the characteristics of the tale in detail and to present my interpretation of it.